

## アウグスティヌス『神国論』

### における Civitas Dei

松 田 禎 二

#### 序

最初の歴史哲学の書と呼ばれるアウグスティヌスの「神国論」De Civitate Dei contra paganosは、極めて問題の多い著作である。それは周知のように、西暦410年永遠の都ローマがゴート族の侵略を受けて未曾有の屈辱を蒙った際に、その禍いをローマの神々の崇拜を禁じたキリスト教の責に帰して、キリストの教会を弾劾してやまぬ者たちに対する一種のキリスト教弁明の書として著わされた。

しかし、それは単なる弁明の域にとどまらず、更に積極的にキリスト教の真理を顕正する意図をも含んでいる。即ち地上に於ける様々な出来事は決して偶然に起るものではなく、神の深い摂理のもとに人間の自由な行動によって織りなされるものであり、そして此の地上を舞台とする悲喜こもごものドラマに他ならぬ人間の歴史を貫いて神の救済の事業は押し進められてゆく、というのである。創造から終末に至る時の流れの中では、救いに予定された「神の国」の市民も、予定されなかった「地の国」の市民も共に混り合って泳いでいる。しかし、世の終りに凡てのものがその営みを止めるとき、キリストは再臨して両者を分離し、永遠の生命と死とをもたらす。地上に於ける人間の歴史は計り難い神の摂理によって導かれている。人間社会の中の教会も国家もみな神の世界経綸の企劃から脱することはない。神は「凡てに於いて凡てである」その時まで、世界創造以前に定めた通り、地上の歴史を導いてゆく、というのである。

我々は此の極めて問題的なアウグスティヌスの大著の中から、その中心

思想をなすところの「神の国と地の国の問題」を取りあげて、以下いささか論究してみたいと思う。

## I civitas の意味

先ず初めに、civitas の意味を原典に即しながら調べてみることにする。アウグスティヌスは civitas という語を必ずしも一義的には用いていないようである。即ち彼は或る箇所では、「都・都市」city, Stadt を指して civitas と呼んでいる。例えば、エルザレムを civitas Dei (神の都) パピロンを civitas diaboli (悪魔の都) という工合に。<sup>(1)</sup> だがまた他の箇所では、「ポリスつまり都市国家」city-state, Stadt-staat を指して civitas と呼んでいる。例えば、アテネを civitas Atheniensium, サグンティンを civitas Saguntinorum というように。<sup>(2)</sup> さらに彼が「国家」state, Staat を指して civitas と呼んでいる場合もある。例えば、メソポタミアを civitas Mesopotamiae という風に。<sup>(3)</sup> 或いはまた彼が「神国論」の前半で、ローマの国家を内部的に徐々に解体せしめて行ったところの邪悪な風習や道德の頹廢について語るときに、しばしばローマの国家を指して civitas と呼んでいる。<sup>(4)</sup> もっとも此の場合に、ローマは或る特定の政治組織をもつ国家としてではなく、むしろ統合された市民の団体としての観点から捉えられているのであって、アウグスティヌスはもし前者のごとき意味になれば、res publica という語をあてているようである。<sup>(5)</sup>

さて、以上に瞥見してみたことから、アウグスティヌスは civitas という語を、それが指し示す対象の場所・規模・政治的構造などにはかかわりなく用いていることが分る。では一体彼はそれらの対象のどのような共通点を捉えて、等しく civitas と呼んでいるのであろうか。「神国論」XV—8にはアウグスティヌスの次のような言葉が見当る。Civitas, quae nihil est aliud quam hominum multitudo aliquo societatis vinculo conligata (「civitas とは、或る団体の絆によって結合された多数の人々に他ならな

い)つまりアウグスティヌスは何らかの団体を、特にそれを構成する多数の人々・人間に着眼する。勿論それらの人々は相互に無関係に個々別々にあるのではなくて、やはり或る団体の絆によって結合されているのである。従って、或る団体 *societas* が先ずそれを構成する人間 *homo, homines* に着目され、次いで人間と人間とを結び合わせる或る団体の絆 *aliquid societatis vinculum* に注目されて、*civitas* と広く呼ばれているわけである。実際アウグスティヌスは「神国論」の中で、しばしば *civitas* を *societas* と言い換えているのに気付く。例えば、「神国論」XVI—10に於いて *civitas, hoc est societas* と、或いはXII—1に於いて *civitates, hoc est societates* という工合にである<sup>(6)</sup>。

ところで、我々はこれまでアウグスティヌスによる *civitas* の一般的な使い方を検討してみたのであるが、それではいよいよ我々の当面の問題である *civitas Dei* や *civitas terrena* に関連づけて、一体これら2つの *civitas* についても、先の一般的な *civitas* の規定、即ち「*civitas* とは、或る団体の絆によって結合された多数の人々」という規定が果して妥当するのか。もし仮に妥当するとするならば、その場合に或る団体の絆 *aliquid societatis vinculum* とは一体何を意味するのか。我々は続いて此の点を究明してみることにする。

そもそもアウグスティヌスは *civitas Dei* とか *civitas terrena* とかいう理念を一体どこから得たのか、と問われるならば、それは何よりも先ず聖書から、と答えざるを得ない。事実「神国論」の中でアウグスティヌス自身がこう述べている。例えば、XIV—1に於いて、*duo quaedam genera humanae societatis……, quas civitates duas secundum scripturas nostras merito appellare possumus.* (2種類の人間の団体を、我々は聖書に従って正当にも2つの国と呼ぶことができる<sup>(7)</sup>。)またXV—1に於いて、*ipsius generis humani, quod in duo genera distribuimus,…… quas etiam mystice appellamus civitates duas, hoc est duas societates hominum.* (人類そのも

のを我々は2つの種類に分けたのであるが、これらを尚我々は神秘的に2つの国、つまり2つの人間の団体と呼ぶ。)とアウグスティヌスは述べているけれども、ここで彼が *myscice* 神秘的に *mystically* と言っているのは、結局比喩的に *allegorically, metaphorically* ということに他ならず、そして此の比喩 *allegory, metaphory* は聖書に於ける *civitas* から得られていることは言うまでもない。いま、聖書に於けるそれらの箇所を具体的に指摘してみるならば、旧約聖書では例えば、詩編48—1, 87—3, 96—4, また新約聖書では、ヘブレオ書11—10, 11—16, 12—22, 13—14, 黙示録2—12, 3—12等である。こうして *civitas Dei* や *civitas terrena* の理念をアウグスティヌスが何よりも聖書から得たことは明らかである。

ところで先の問題点にもどって、これらの2つの *civitas* を我々が既に知ったあの一般的な *civitas* の規定に関連づけるとどうなるであろうか。先ず *civitas* は多数の人々・人間から成るところの団体でなければならなかったが、これら2つの *civitas* も只今の引用から直ちに明らかのように、人間の団体であり、しかも人類そのものを2分して、そのいずれか一方を1つの *civitas* が、また他方を他の *civitas* が包含するほどの壮大極りなき団体である。次に *civitas* は或る団体の絆によって結合されたところの団体でなければならなかったが、それではこれら2つの *civitas* という壮大なる団体を結合せしめている絆は一体何であろうか。「神国論」I—15には、アウグスティヌスの次のような言葉が見出される。 *aliud civitas non sit quam concors hominum multitudo.* (*civitas* とは、同じ心の多数の人々に他ならない。)すると、これら2つの *civitas* を各々結合せしめている絆は同じ心 *concordia* ということになるのであろうか。そして思うに、多数の人々が同じ心をもつのは、何か或る1つのものに人々の心が集中し、その1つのものを中心として相互に多くの心が結ばれ合う場合のように考えられるが、それでは *civitas Dei* に於いて、多数の人々の心をつなぎ合わせる絆の中心は一体何であろうか。また *civitas terrena* についても同様な

ことが言えるとしたら、その中心は何であろうか。いや、そもそもこのように異なる中心をもつこれら2つの *civitas* がどのようにして由来し、しかも人間は誰でもそのいずれか一方に属しなければならない、といった事態がどのようにして生じたのであろうか。我々はそこで、*civitas Dei* と *civitas terrena* との起源の問題に関心を移し、次に此の問題を取り上げて解明してみることにしよう。

## II *civitas Dei* と *civitas terrena* との起源

さて、「神の国」と「地の国」の起源は、神の世界創造を前提とするゆえ、いま必要な限りで簡潔にこれについて述べ、神と被造物ことに理性的被造物との関係を見定めておくことにする。「はじめに神は天と地とを創造された」(Gen. 1-1) アウグスティヌスは旧約聖書の「創世記」冒頭の此の言葉を典拠として、神が世界を創造したこと、従って神は世界の創造主であることを主張する。<sup>(9)</sup> 即ち「神国論」Ⅹ-4に於いて、「目に見える凡てのものの中で最大なるものは世界であり、目に見えない凡てのものの中で最大なるものは神である。しかるに世界が存在することを我々は見神が存在することを我々は信ずる。だが神が世界を創造したことを神自身よりも一層完全には何びとにも信じない。ではどこで我々は神に聞いたのか。聖書に於いてよりも一層良くはどこにも我々は聞かなかった。そこで神の予言者は『はじめに神は天と地とを創造された』と語ったのである。<sup>(10)</sup>」このように神が世界を創造したことの完全な証言者は何びとよりも神自身であり、そして我々はその神から、神の言葉を書き記した聖書を通して聞くのである。

しかし、何故神は世界を創造したのであろうか。神の世界創造の理由は一体何であるのか。それはアウグスティヌスによれば、世界を創造することが神にとって善であったからである。つまり、神は何らかの必要の故に、何らかの欠乏を満たすために創造したのではなくて、ただ神の善性 *bonitas*

Dei に従って、即ちそうすることが善であったが故に、世界を創造したのである。それ故、アウグスティヌスは「神国論」Ⅺ-23に於いて次のようにいう。「善い神が善いものを造った。造られたものは神ではないから神に劣るけれども、だが善いものであって善い神による以外には生じなかったであろう、という此のこれほどに立派で単純な世界創造の理由を立派に単純に信ずること」<sup>(11)</sup>—これが我々にとって大切である。しかしながら、善い神が善いものを造ったというのであれば、神もその神によって造られたものも、つまり被造物も共に善であるということになりそうであるが、それでは神と被造物とはどのように異なるのであろうか。アウグスティヌスが「神国論」Ⅺ-10に於いて述べるところによれば、「そのみに於いて述べるところによれば、「そのみが単純で、従ってそのみが不変的であるような善がある。これが神である。この善によって凡ての善いものは創造されたが、しかし単純なものではなく、従って不変的なものでもない。」<sup>(12)</sup>このように神は単純で simplex 不変的な incommutabile 善であり、これに対して、その神によって造られたる被造物は確かに善ではあるが単純でなく、また不変的でもない。まさしく此の点に両者の相違が認められるのである。

ところで只今は、神と被造物との関係を善 bonum という観点から考察してみたのであるが、次に存在 ens という観点から考察してみればどうであろうか。アウグスティヌスはやはり善の秩序と同時に存在の秩序を説いている。即ち彼は「神国論」Ⅺ-2に於いてこう言っている。「神は最高の存在である故に、即ち最高に存在し従って不変的である故に、無から創造したものに存在を与えた。もっとも神自身がそうであるような最高の存在をではないが、神は或るものに存在をより多く、また或るものに存在をより少く与え、こうして存在の本性を段階的に秩序づけたのである。」<sup>(13)</sup>このように神は最高の存在であり、それで無から創造した被造物に存在を附与して、それらを段階的に秩序づけたのである。彼は被造物の間の本性の秩序 ordo naturae に言及して、「神国論」Ⅺ-16に於いて更に次のような

ことを言っている。被造物の内では生命のあるものはないものにまさる。生命あるものの内では、感覚をもつものはもたぬものにまさる。感覚あるものの内では、知性をもつものはもたぬものにまさる。そして知性あるものの内では、不死なるものは死すべきものにまさる。そこで天使は人間にまさるのである、と。こうして被造物の内でも、天使や人間のような理性的被造物は上位に存している。勿論理性的被造物とて、神によって *ab Deo* 造られた故に善いものではあるが、しかし神から *de Deo* 造られたのではなくて、無から *ex nihilo* 造られた故に可変的なものである。<sup>(15)</sup> けれども、その自由意志をもって不変的な最高善なる神によりすがり、かくて幸福であり得るような仕方では創造されている。従って、神によりすがらぬことは理性的被造物の本性に反することであり、欠陥 *vitium* であって、当然悲惨を招くというのである。<sup>(16)</sup>

さて我々は以上に、神と被造物ことに理性的被造物との関係を見定めたので、急いで本筋にもどって我々の当面の問題、即ち「神の国」と「地の国」の起源の問題を解明してゆくことにする。アウグスティヌスはこれら2つの国の起源は、実は天使たちの間に生じた2種類の相違 *diversitas* によっておかれたという。先に述べたように、理性的被造物たる天使は不変的な最高善なる神によりすがることができ、このよりすがり *adhaesio* によって幸福であることができた。また神は本性の品位 *dignitas naturae* に於いて、他の凡ての被造物にまさる天使に知性を与えて神を観想し享受することができるようにし、また自由意志を与えて、もしも至福なる神を見捨てたならば直ちに悲惨が幸福にとって代るようにしていた。ところが天使の内では或る天使は凡てに共通の最高善なる神に於いて、その永遠性と真理と愛とに於いて不断に持続したのに対して、或る天使はあたかも自分が自分の善であるかの如くに自己満足して、あの凡てに共通の一層すぐれた至福な善から自からの特殊な善に墮したのである。<sup>(17)</sup> かくて天使に2種類の相違が生じた。即ち幸福な善い天使と悲惨な悪しき天使とである。そして

アウグスティヌスのように、善き天使の幸福の原因は神へよりすがっていること *adhaerere Deo* であり、悪しき天使の悲惨の原因は、反対に、神によりすがっていないことである。<sup>(19)</sup>しかし、これら2種類の天使の相違はその本性 *natura* に基くものではなく—というのには、いずれも善き神によって創造されたのであるから—その意志 *voluntas* に基くのである。つまり、<sup>(20)</sup>悪しき天使は自らの悪しき意志によって墮落したのである。

それでは悪しき天使の悪しき意志 *mala voluntas* を原因したものは何であるか。何が彼らの意志を邪悪にしたのか。アウグスティヌスは悪しき意志の原因を探索して、結局悪しき意志はそれ自身 *effectio* ではなくして、*defectio* である故に、悪しき意志の *causa efficiens* はなく、むしろ *causa deficiens* があるだけだ。つまり、最高に存在するもの即ち神からより少く存在するもの即ち自己へ *deficere* すること、これが悪しき意志をもつことに他ならない。だから、このような *defectio* の何らかの原因を見出そうとするのは恰も闇を見ようとしたり、沈黙を聞こうとしたりするのに似ている、とアウグスティヌスはいう。<sup>(21)</sup>繰返して言えば、意志が本性的にそれ自身悪なる対象に向うというのではなくて、意志がその本性の秩序に反して、最高の存在をもつものからそうでないものへ向うということ、この意志の *defectio* それ自体が悪なのである。従って、悪しき天使の悪しき意志の *causa efficiens* は存しない。彼らの悪しき意志そのものが、それによって本性の善が損なわれたところの悪の起源であるから。そして彼らの意志は、最高善なる神から特殊な善なる自己へ *deficere* すること以外には悪くはならなかった。それ故、この *defectio* は自己満足 *sibi placere* 乃至は高慢 *superbia* と呼ばれる。ともかく此のようにして、天使の間に相違が生じて2種類の団体が成立したのであるが、その相違によって2つの国、即ち「天の国」と「地の国」乃至は「神の国」と「悪魔の国」との起源がおかれたのである。そして、これら2つの天使の団体はアウグスティヌスの描写するところによれば、「一方は神を享受し、他方に傲慢にふくれ上がり、



一方は神への聖なる愛もて燃えたち、他方は自己増慢の汚れた欲望で悪臭を放っており、一方は諸天の天上に住まい、他方はそこから投げ落されて下界で荒れ狂っており、一方は輝かしい敬虔をもって安静であり、他方は暗闇の欲望をもって攪乱している。一方は神の指図によって優しく助け義しく報い、他方は自らのうぬぼれによって征服し傷つけんとする欲望で燃えさかっている。そこで、これら2つの天使の団体は互いに似ていずに相反している<sup>(22)</sup>のである。」

さて、以上の考察によって、2つの国の起源が天使の間に生じた2種類の相違によっておかれたことが明らかとなったのであるが、更に人間に関する限りでこれら2つの国がどのようにして起源したかを追究してみたい。アウグスティヌスは旧約聖書の「創世記」の叙述に従って、神が最初に人祖アダムを造ったことを認める。人類はその最初の1人の人から始まったのである。しかし、何故神は最初に1人の人間アダムのみを創造したのか。それはアウグスティヌスによれば、こうすることによって人間社会の統一unitas と和合 concordia の絆がより強くなるように、また人が相互の本性の類似によってのみならず、人間的感情の認知によって結合されるように<sup>(23)</sup>であった。その人祖は高慢から神の誠めを破って罪に墮し、そのため本性が壊敗し *corrumpere* 死を免れなくなったが、この罪の罰は人祖のみならず、<sup>(24)</sup>その子孫つまり人類全体を巻き添えにした。<sup>(25)</sup>こうして人類全体が断罪 *condemnatio* されているのであるが、しかし、神は全知であり全能であるならば、神は人祖の墮落を予知していたに相違ない。では何故予知しておりながら、それを阻止しようとはしなかったのか。罪を犯して自ら悲惨に落ち入るはずの人間を何故神は創造したのか。アウグスティヌスは答える。勿論神は人祖の墮罪を予知していた。しかしまた神は、断罪された人類の中から或る人々が恩寵によって世嗣に召されるであろうこと、罪の赦しによって義とされて聖なる天使たちに結合されるであろうことも予知していた。<sup>(26)</sup>神は悪をも善く用いることができるのである。<sup>(27)</sup>こうして人間に関する

限り、神の予知によって人祖に於いて2つの国の起源がおかれた。というのは、あの1人の人間アダムから凡ての人間は由来すべきであり、そして彼らの内の或る者は恩寵によって善き天使と結合され、また他の者は罰によって悪しき天使と結ばるべきであったから。それ故、結局4つの国つまり天使に関する2つの国と人間に関する2つの国とがあるのではなくして、2つの国つまり善き天使と人間の国、それと悪しき天使と人間の国がある<sup>(28)</sup>のである。

以上、人間に関する限りで2つの国の起源を追究してみたのであるが、要するに、人祖の墮落によって人類はその人祖に於いて断罪されており、その限りでは皆罪人の状態にあり、従って「地の国」の市民であるが、しかし神はその罪人の群れの中から自由に選んだ者たちを恩寵によって「神の国」の市民として予定したのである。<sup>(29)</sup>そこでアウグスティヌスはいう。「地の国の市民は罪によって欠陥ある本性によって得られるが、天の国の市民は罪から本性を自由にする恩寵によって得られる。前者は怒りの器 *vasa irae* と呼ばれ、<sup>(30)</sup>後者は憐みの器 *vasa misericordiae* と呼ばれる。」こうして人間は皆これら2つの国のいずれかに属するのであるが、更にこれら2つの国の特徴を比較することによって一層明らかにし、言わば人間の2大類型を浮彫りにするように努めてみよう。

### III 2つの国の特徴の比較

アウグスティヌスは「神国論」XV-1で、「人類の2つの種類の内の1つは神と共に永遠に支配すべく予定されており、他は悪魔と共に永遠の責め苦を受くべく<sup>(31)</sup>予定されている。」と述べている。確かに、アダムの原罪による人類の断罪を重視するならばこのような厳しい口調となりがちであるが、しかし、神の予知・予定と人間の意志とは必ずしも背反するものではなく、人間は神の予定の範囲内で自由意志によって行為することができる。<sup>(32)</sup>そこで今この点から2つの国の特徴を考察してみるならば、どうな

るであろうか。アウグスティヌスは「神国論」XIV—1に於いて、次のように述べている。「地上には儀式・風習・言語・武器・衣服のさまざまな相違によって区別される極めて多くの国々があるけれども、だが我々が聖書に従って正当にも2つの国と呼ぶことのできる2種類の人間の団体以上にはない。即ち1つは肉に従って生きることを欲する者たちから成り、他は<sup>(33)</sup>霊に従って生きる者たちから成る。」ここで2つの人間類型が示されている。即ち肉に従って生きることを欲する人間と、霊に従って生きることを欲する人間とである。それでは、肉に従って生きる *secundum carnem vivere* とは、また霊に従って生きる *secundum spiritum vivere* とは一体如何なることであろうか。「肉」*caro* という語によって、聖書は地上の死すべき動物の体を意味するのみならず、また人間そのものをも意味することがある<sup>(35)</sup>。即ち人間の構成部分である肉によって人間の全体を意味するのである。<sup>(36)</sup>ところで、肉に従って生きることの意味を知るためには、聖パウロの「ガラテア書」の1節 (*Gal.*, V—19~21) を吟味してみる必要がある。そこにはこう記されている。「肉の働らきは明白である。即ち不品行・汚れ・好色・偶像礼拝・まじない・敵意・争い・そねみ・怒り・党派心・分裂・分派・ねたみ・泥酔・宴樂及びその類である。私は以前にも言ったように、今も前もって言うておく。このようなことを行う者は神の国を継ぐことがない。」我々はこの1節に於いて、聖パウロが断罪のために引用した肉の働らきの内には、不品行・汚れ・好色・泥酔・宴樂のように肉体の快樂に関するもののみならず、魂の悪徳を示すものを見出す。例えば、偶像礼拝・まじない・敵意・争い・そねみ・怒り・党派心・分裂・分派・ねたみ等である。そこで我々は、聖パウロがここで肉という言葉によって人間の全体を意味していることを知るのである。それ故、肉に従って生きることは結局人間に従って生きることを意味する。それに対して、霊に従って生きることは神に従って生きることである。<sup>(37)</sup>そして凡ての人々は、人間に従って生きる者 *qui secundum hominem vivunt* と神に従って生きる

者 *qui secundum Deum vivunt* との 2 大類型に大別される。それ故にアウグスティヌスはいう。「人類を我々は 2 つの種類に区分する。即ちその 1 つは人間に従って生きる人々であり、他は神に従って生きる人々である。」<sup>(38)</sup>こうして、地の国は肉に従って即ち人間に従って生きる者から成り、神の国は<sup>(39)</sup>霊に従って即ち神に従って生きる者から成るのである。

さて、以上に我々は 2 つの国の基本的な特徴を指摘してみたのであるが、次には更に具体的に 2 つの国の特徴を比較しながら考察してみよう。先ず「神の国」と「地の国」とは、その崇拜の対象としての神及びその神に対する態度の点で根本的に相違している。神に従って生きる「神の国」の市民たちは当然に唯一の真なる神を崇拜してその神に奉仕する。しかるに、人間に従って生きる「地の国」の市民たちは真の神を軽んじて多くの偽りの神々を崇拜し、しかも人間のさまざまな地上的な利益のために、さまざまな役目をもつ神々を作り出してはその神々に犠牲を捧げる。勿論「神の国」では神々を作ることはなく、かえってそれ自身が真の神によって造られたのであり、また何らかの犠牲を捧げて神の気を引くことはなく、かえってそれ自身が犠牲なのである。<sup>(40)</sup>そして、「神の国」の王にして建設者たる者はキリストであって堅固な基礎をもち、その市民たちは創造主たる神と共に生き、神への無条件の依存によって平和であり、幸福であるが、「地の国」の王は邪悪な悪魔であって脆弱な基礎をもち、その市民たちはさまざまな被造物の善に心を寄せるために不安であり真に幸福ではない。<sup>(41)</sup>それから、「神の国」を特色づけるものは真なる神への信仰であり、敬虔であり、従順であるが、「地の国」を特色づけるものは不信仰であり、不敬虔であり、<sup>(42)</sup>不従順である。そして「神の国」の特徴が謙遜と神への愛にあるのに対して、「地の国」の特徴は高慢と自己愛にある。<sup>(43)</sup>従ってアウグスティヌスはいう。「2 つの国は 2 つの愛によって造られた。地の国は神をないがしろにするまでの自己愛によって、天の国は自己をないがしろにするまでの神への愛によって。」次に、「神の国」と「地の国」との相違はこの世

(世間・世俗)に対するその立場に於いても明らかである。即ち「地の国」の市民たちにとっては此の世は唯一にして凡てであり、そこで彼らは此の世のものを恰も最高の善であるかの如く見倣して、地上の享樂を唯一の楽しみとしてそれに耽ける<sup>(45)</sup>。しかるに、「神の国」の市民たちは此の世を越えた世界を認め、そしてそこにこそ眞の平和と幸福とがあることを知っているから、此の世のものはいわゆる「用いないかの如くに用い」、そして此の世に於いては来世に於ける永遠の幸福を希望しつつ信仰をもって生きる。従って、彼らは此の世にあっては異邦人であり遍歴者であって、「神の国」は此の地上では遍歴 *peregrinatio* の状態にある<sup>(46)</sup>。アウグスティヌスは神と世に対する2つの国の市民たちの心的態度を次のように指摘している。「善き者たちは神を享受するように世を用いるが、悪しき者たちは、それとは逆に、世を享受するように神を用いることを欲する。」<sup>(47)</sup>と。更に「神の国」と「地の国」とは、その市民たち相互の關係に於いても著るしい相違を示している。即ち自己愛に燃えたち、さまざまな地上の善を欲望してひたすらそれらを追求する「地の国」の市民たちの間では、当然なことながら争いが絶えない。彼らの心は支配への欲望によって自ら支配されている<sup>(48)</sup>。しかるに、神への愛に燃えたち、天上の最高善を心にかけて地上のものは「用いないかのように用いる」ところの、「神の国」の市民たちの間には争いは起らず、かえって神の家族として、神を中心に結び合わされた相互の心の一致 *concordia* が認められる<sup>(49)</sup>。そして彼らが指導的立場に立つときには、義務に従って統治し、仕えるために支配するのである<sup>(50)</sup>。以上に我々は2つの国の特徴を比較してみたのであるが、次に此の地上に於ける2つの国の相互の關連について考察してみよう。

#### IV 地上に於ける2つの国の關連

さて、考察の便宜のために、ここで改めて「神の国」と「地の国」との構成を振り返してみる。「神の国」が存在することは聖書の多くの箇所に

よって証明されるのであるが、その「神の国」を構成する者たちは最高の存在、最高の善なる神に共通によりすがり相互に聖なる友情をもって結ばれているところの聖なる天使であり、またその天使に結合されるべく恩寵によって予定されている人間である。<sup>(52)</sup>そして聖なる天使は既に天上の住まいに於いて安らっており、完全に幸福であるが、その天使に結合さるべき人間はまだ悲惨な地上を遍歴しており、その期間に恩寵によって成長し、次第々々に罪からいやされているのである。聖なる天使は唯一の真なる神にのみ犠牲が捧げらるべきことを知っているのです、人間に犠牲を自らへ求めることはなく、かえって共々に神の犠牲となることを欲し、また人間を天上から助ける。<sup>(53)</sup>それでも「神の国」を人間に関してのみ見るならば、「神の国」は此の地上では異邦人として遍歴の状態にある。<sup>(54)</sup>次に、「地の国」を構成する者たちは、高慢 *superbia* によって最高の善なる神から自己の善へ墮して悲惨となり、罪を受けて此の世界の最底に投げ下されたところの邪悪な天使であり、またその天使に結合さるべく予定されている人間である。そして先の「神の国」がキリストをその王とするように、この「地の国」は悪魔を王とするのであるから、厳密には「神の国」に対立するものとしての「地の国」はむしろ「悪魔の国」 *civitas diaboli* と呼ばるべきである。<sup>(55)</sup>もっとも「地の国」という名称は、このように厳密に「神の国」に対立するものとして狭義に用いられている場合のほか、もっと漠然と地上に於ける国といった意味で用いられている場合もある。それ故2つの国は、もしそれらが世界の終末に於ける最高の審判を経て分離され完結された姿に於いて見られるときには、その間には厳格な対立があるのみであって、そこにはいささかの妥協もあり得ない。<sup>(56)</sup>しかし、世界の創造から終末に至る期間の此の地上での姿に於いて見られる場合にはどうかであろうか。アウグスティヌスによれば、「これら2つの国は此の世に於いてはもつれ合っており、最後の審判がそれらを分離するまでは互いにまじり合っている。」<sup>(57)</sup>そうしてみれば、2つの国は少くともその上で互いにドラマを

演ずるところの地上の舞台を共通にもつわけである。勿論それだけではない。それに関連してさまざまな共通点が出てくる。今その幾つかを指摘してみれば、先ずその第1は誕生・出生 *generatio* である。「此の世の子らはめとったりとついだりする。」(Luc., XX—34) 此の世に於いては遍歴している神の国も、そこに於いてもはやめとったりとついだりしないところの天上に辿り着くまでは出生によって導かれる。言うまでもなく「神の国」の市民たちはキリストの洗礼を受けて再生 *regeneratio* をし、遍歴の期間に神の恩寵によって成長してゆくのであるが、しかし此の世に於いては出生の2つの国に共通である。<sup>(58)</sup> 第2は地上の財 *bona* である。「神の国」の市民といえども此の地上の世界に生きている限り、地上の財を用いないわけにはゆかぬ。しかし、その用い方は前述したように著るしく異なる。即ち「地の国」の市民たちは地上の財を、それが唯一の善であるかのように見做して享受するが、「神の国」の市民たちは天上の優れた善を知っているので、地上の善はいわゆる「用いないかの如く用いる」のである。しかしそうはいっても、全く無しに済ますわけにはゆかぬ。<sup>(59)</sup> 第3は地上の平和 *pax* である。「神の国」の市民たちはその国の至高善が完全にして永遠なる平和であることを知っているが、<sup>(60)</sup> しかし地上に生きている限り地上の平和を喜び、この地上の平和を天上の平和に結びつけようとする。<sup>(61)</sup> 第4は地上の禍いや悲惨である。「神の国」の特徴は言うまでもなく永遠の平和であり永遠の浄福であるが、だがその国の市民がこの地上に於いて遍歴している間は、「地の国」の市民と同様に神の摂理によって下されるさまざまな時間的な禍いや悲惨を避けることはできない。<sup>(62)</sup> このように、2つの国が地上の舞台を共通することによって種々の共通点が派生してくるのである。ここで一言付け加えておけば、前述したように「地の国」が漠然と地上に於ける国といった広い意味に解される場合、「地の国」の1部分が「天の国」の似像 *imago* として「天の国」を象徴するために「聖なる国」 *civitas sancta* と呼ばれている例がある。即ちそれは地上のエルザレムである。

そこで我々はその「地の国」に於ては、それ自身の明らかな現存と「天の国」の象徴的な表出とを見出す。<sup>(63)</sup>従って、地上のエルザレムは「天の国」の地上に於ける端的な現出ではなく、かかる国が存在することを人々に思い起させる目的のために象徴的に存するのである。かくて、地上のエルザレムは天上のエルザレムを象徴し、イスラエルの民は神の民を象徴する。<sup>(64)</sup>

(付記、紙数の制限と研究の不足からIV章は単なる素描に終った。後日改めて発表の機会をもちたい。)

### 註

- (1) De Civitate Dei XV—2; XVIII—41参照。尚、アウグスティヌスが civitas を直接に urbs (都市) と言い換えている箇所として、ibid., XIX—7 post civitatem vel urbem sequitur orbis terrae.
- (2) ibid., XVIII—9; III—20 参照。
- (3) ibid., XVI—15 参照。
- (4) 例えば、ibid., II—18 参照。尚、ロイターは次のように言っている。(H. Reuter: Augustinische Studien, Gotha, 1887, p132) das Wort civitas unvermerkt von der Bedeutung, Stadt' übergeht in die andere, Staat', ohne doch ursprüngliche Ganz zu verlieren.
- (5) ibid., II—12; II—13; II—19; II—21; II—25; III—15; III—19; V—12; V—18 etc.
- (6) この他に、ibid., XV—1; XV—18; XV—20
- (7) この他に、ibid., V—19; XI—1
- (8) R. H. Barrow: Introduction to St. Augustine The City of God, London, 1950, p271 を参照。
- (9) De Civ. Dei VIII—10 secundum Deum, a quo ipse factus est mundus. ibid., IX—16 Deum quidem summum omnium creatorem, quem nos verum Deum dicimus.
- (10) 原文を示せば、Visibilium omnium maximus mundus est, invisibilium omnium maximus Deus est. Sed mundum esse conspiciamus, Deum esse cre-



dimus. Quod autem Deus fecerit mundum, nulli tutius credimus quam ipsi Deo. Ubi eum audivimus? Nusquam interim nos melius quam in scripturis sanctis, ubi dixit propheta eius; In principio fecit Deus caelum et terram.

(11) *ibid.*, XI—23 Nullam aliam causam faciendi mundi intellegi voluit, nisi ut bona fierent a bono Deo,.

(12) tamen istam causam fabricandi mundi tam bonam ac simplicem bene ac simpliciter credere, ut Deus bonus conderet bona et essent post Deum quae non essent quod est Deus, bona tamen, quae non faceret nisi bonum Deus.

(13) Est itaque bonum solum simplex et ob hoc solum incommutabile, quod est Deus. Ab hoc bono creata sunt omnia bona, sed non simplicia et ob hoc mutabilia.

(14) Cum enim Deus summa essentia sit, hoc est summe sit, et ideo inmutabilis sit:rebus,quae ex nihilo creavit, esse dedit, sed non summe esse, sicut est ipse;et aliis dedit esse amplius aliis minus, atque ita naturas essentiarum gradibus ordiavit,

(15) *ibid.*, XII— 1

(16) *ibid.*, XII— 1

(17) *ibid.*, XI—15 ; XXII— 1

(18) *ibid.*, XII— 1

(19) *ibid* XII— 1 Beatitudo igitur illorum causa est adhaerere Deo; quocirca istorum miseriae causa ex contrario est intelligenda, quod est non adhaerere Deo. *ibid.*, XII— 6 参照。

(20) *ibid.*, XII— 1

(21) *ibid.*, XII— 6

(22) *ibid.*, XI—33

(23) *ibid.*, XII—22

(24) *ibid.*, XIV—12

(25) *ibid.*, XIII— 3

(26) *ibid.*, XII—23

- 27) *ibid.*, XIV—27
- 28) *ibid.*, XII—1
- 29) *ibid.*, XV—1
- 30) *ibid.*, XV—2 Parit autem cives terrenae civitatis peccato vitiata natura, caelestis vero civitatis cives parit a peccato naturam liberans gratia: unde illa vocantur vasa irae, ista vasa misericordiae. *ibid.*, XV—21 参照。
- 31) quarum (duo genera generis humani) est una quae praedestinata est in aeternum regnare cum Deo, altera aeternum supplicium subire cum diabolo.
- 32) *ibid.*, V—9 ; V—10
- 33) cum tot tantaeque gentes per terrarum orbem diversis ritibus moribusque viventes multiplici linguarum armorum vestium sint varietate distinctae, non tamen amplius quam duo quaedam genera humanae societatis existeret, quas civitates duas secundum scripturas nostras merito appellare possumus. Una quippe est hominum secundum carnem, aetera secundum spiritum vivere…….
- 34) ICor. XV—39 参照。
- 35) Rom. III—20 ; Ioan. I—14 参照。
- 36) De Civ. Dei. XIV—2
- 37) *ibid.*, XIV—4
- 38) *ibid.*, XV—1 quod (genus humanus) in duo genera distribuimus, unum eorum, qui secundum hominum, alterum eorum, qui secundum Deum vivunt.
- 39) *ibid.*, XV—27 ; XIV—9
- 40) *ibid.*, XIX—17 ; XVIII—54
- 41) *ibid.*, XVII—20 ; XV—20 ; XVIII—4
- 42) *ibid.*, V—15 ; XXII—6 ; XIX—17
- 43) *ibid.*, XIV—13
- 44) *ibid.*, XIV—28 Fecerunt itaque civitates duas amores duo, terrenam scilicet amor sui usque ad contemptum Dei, caelestem vero amor Dei usque ad contemptum sui.

- 46) *ibid.*, XV—15 ; IV—34
- 47) *ibid.*, XV—18 ; XV—21 ; XV—15 ; XV—20 ; XV— 21 ; XV— 26 ; XVII— 3 ; XVIII— 2
- 48) *ibid.*, XV— 7 Boni quippe ad hoc utuntur mundo, ut fruantur Deo; mali autem contra, ut fruantur mundo, uti volunt Deo.
- 49) *ibid.*, I— 1
- 50) *ibid.*, XV— 3 ; XIX—17 ; I—29 ; I—35
- 51) *ibid.*, XIX—14
- 52) *ibid.*, XI— 1
- 53) *ibid.*, XI— 9 ; XII— 9 ; X—25
- 54) *ibid.*, XI—31 ; XIX—23 ; X— 7 ; X—25 ; X—26 ; XV—16
- 55) *ibid.*, XVIII— 1
- 56) *ibid.*, XVII—20 quod pertinet ad civitates duas, unam diaboli, alteram Christi, et earum reges diabolum et Christum. XX—11 civitas Christi et civitas diaboli. XXI— 1 civitas Dei et civitas diaboli
- 57) *ibid.*, XI—33 ; XI— 1 ; XI—34 ; XIV—13
- 58) *ibid.*, I—35 Perplexae quippe sunt istae duae civitates in hoc saeculo invicemque permixtae, donec ultime iudicio dirimantur
- 59) *ibid.*, XV—20
- 60) *ibid.*, XVIII—54 ; XIX—17
- 61) *ibid.*, XIX—20
- 62) *ibid.*, XIX—17
- 63) *ibid.*, XVIII—54 ; I— 8
- 64) *ibid.*, XV— 2
- 65) *ibid.*, XV—20 ; XVI— 3 ; XVII—12 ; XVII—13 ; XVIII—47 ; XX—21